地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円（本体139円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

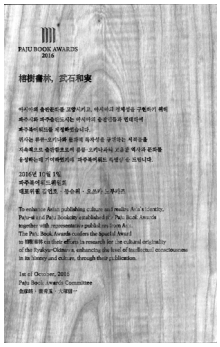
発行所　㈱地方・小出版流通センター　〒162-0836　東京都新宿区南町20
編集　アクセス編集委員会　TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

2016.10.1

東アジア出版文化賞授賞式に招かれて

文・榕樹書林代表　武石 和実

写真右から5番目が私（武石）、その右隣が夫馬進氏



賞状牌

韓国パジェで開催されているパジェ・ブック・アワードの中心的イベントの一つとしての東アジア出版文化賞の特別賞授賞ということで招かれて韓国に渡ったのは9月30日であった。那覇発のアシアナ航空便で韓国仁川国際空港に着いたのは5時頃、迎えの車でパジェに向い6時頃にホテル「紙之郷」に入った。

「紙之郷」はパジェブックシティの主センターであるアジア出版文化センターに隣接しており、ロビー内の壁という壁は、四方八方全て本で埋め尽くされ、圧倒的な本の力を示していた。レストランでの食事会には先着していた日本の東アジア出版人会議の主要メンバーである大塚信一（岩波書店前社長）・加藤敬事（みすず書房前社長）・龍澤 武（元平凡社編集局長）の各氏や、パジェのキム・ヨンファ氏等と供に懇談した。

パジェ・ブックシティを訪問

翌10月1日は、パジェ出版文化財団の担当者の案内でブックシティをみて回った。当日はブック・アワードのイベントで、通路には300近い出版社のテントが出て、通りを埋めていた。多くの出版社が普段より安い価格で本を販売しているのでそれを目当てに多くの人が訪れていた。ブックシティは街の外れにある大型ショッピングモールも含め、様々なイベントを企画することによってソウル等からの集客に努め、それが上手く機能している様なのだ。案内ではブックシティの形成過程、書築共業の試み、出版社のオープンハウス等を通して韓国の出版産業の熱いエネルギーを感じ取ることが出来た。

パジェはソウルから50㎞ほど北にあり、非武装地帯に隣接している。ブックシティはその西部に1990年頃から形成された46万坪の出版産業団地である。250の出版関連産業が事業所を構え、ゆくゆくは600社にもなる予定だという。ここには出版社、印刷所、製本所からブックデザイン事務所、ライタースクール、編集デザインスクール、流通センター、交流センター、街全体を紹介する博物館、新刊書店、古書店まで本に関連するあらゆる業種が集積しており、第3段階へと移行する今日では映像産業を積極的に取り込んでいるという。

訪韓の主目的である授賞式は、センター内のホールで80人ほどが出席して開催された。パジェ市長、財団理事長キム・ヨンファ氏などのあいさつに続き、龍澤氏が選考審査の報告をした後、授賞に移った。

ステージの後には授賞者の名前等をデザインした大きな垂れ幕が下がり、その前で木製の楯とブロンズの記念のオブジェが手渡された。本をデザインした長さ57㎝、幅8㎝ほどのものである。尚、今回の受賞者は著者賞が京都大学名誉教授の夫馬進氏（『朝鮮燕行使と朝鮮通信使』名古屋大学出版会）デザイン賞が香港の趙廣昭氏、出版企画賞が広西師範大学出版社そして特別賞が私であった。夫馬先生は当社からも1冊出して頂いているので、感慨深いものがあった。その後、声楽歌手による独唱と合唱が披露され、パーティーに移った。

2日は全北大学の林慶澤教授（文化人類学、韓国琉球沖縄学会会長）の案内で韓国国立博物館、ハングル博物館等をみて回った。日本人グループと台湾の林載爵氏（聯經出版事業公司発行人）が一緒であった。

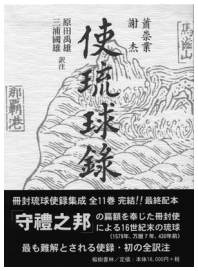
韓国ではいわばハングル・ナショナリズムで漢字がほとんど消えて、博物館の展示も民族的誇りを鼓舞するような指向が感じられた。韓国の多数の古典籍に触れることが出来たのは収穫であったが、いわゆる漢籍はほとんど展示されておらず、専らハングル本で、韓国が漢字文化圏からの離脱を志向しているのでは、という想いを強く感じたのである。

3日は帰路につくはずであったが、

紙の郷ロビーの一角

榕樹書林の刊行図書

『訳注　質問本草』／原田禹雄著／本体価格25,000円・B5判・626頁・200207刊・ISBN9784947667809



『使琉球録』／簫崇業著／本体価格18,000円・A5判・540頁・201103刊・ISBN9784898051481

『サンゴ礁に生きる海人　－琉球の海の生態民族学』／秋道智彌著／本体価格6,400円・A5判・424頁・201609刊・ISBN9784898051825

台風18号で帰ることが出来ず終日空白スケジュールとなった。そこで、財団理事長でハンギル社社長キム・ヨンファ氏の案内で非武装地帯に近接する地域を回り、南北の緊張関係の現実に接することとなった。鉄丈網の厳重さや、車両を停止しての撮影の禁止等がその厳しさを表していた。都羅展望台からは北朝鮮を望むことが出来た。その後、キム・ヨンファ氏が設立した「ハンギル・本の博物館」を見学（ここはウィリアム・モリスのケルムスコット・プレスの全点を所蔵しており、展示もモリスの作品を中心にヨーロッパの名高い名著をメインとしたものであった。）した。

パジェ・ブックシティの構想と実現のバックボーンとして、ウィリアム・モリスの出版活動とユートピア的社会主義の思想を見出すことが出来るのでは、と強く感じるものがあった。これは日本の白樺派の文学運動や、柳宗悦の民藝運動とも通じるものがあるだろうと思う。（この博物館はパジェから10㎞ほど離れた文化芸術村の中にある）

台風18号の影響で、那覇空港が閉鎖され帰りは翌4日17:00となった。従って4日は午前中ほぼフリータイムとなったので、朝からブックシティを一人で歩き回った。沖縄タイムスの友利氏は4日朝早くの便で帰っていた。

街全体がいわば建築ミュージアム

パジェ・ブックシティのすごい所は街全体が本で溢れていることと、それを支える建築が、「書築共業」という概念のもので時代の最先端をいくデザインで構築されている、ということである。街全体がいわば建築ミュージアムになっているのである。案内書『坡州出版都市の物語』の目次の中に「夢見る者だけに未来がある」という一項があり、このブックシティ建設に向けた気概がよく表れている。出版の歴史を語る時、パジェ出版都市の構築はまさに世界史的偉業であり、他に類例のない本のユートピアが可視化されているのだと言えよう。

今回の授賞を受けて当社の本の韓国語版刊行の話も出ている。また、大がかりな文化交流事業の計画も持ち上がっている。緊迫し、複雑な状況に陥っている日韓関係の中に、沖縄の出版界が独自の立ち位置で存在し、交流していくことは、新しい東アジアの未来像を描いていく上で何らかの貢献を成し得るのではないか、と期待と希望を含め、確信を深めた訪韓であった。

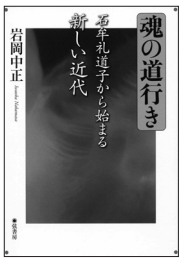
＊

（たけいし　かずみ／榕樹書林代表）

新刊ダイジェスト

※価格は税込（消費税率8%）表示です。

『魂の道行き　－石牟礼道子から始まる新しい近代』●岩岡中正著

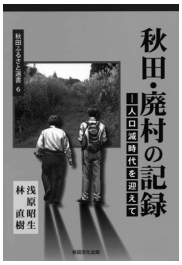


本書は名著『苦海浄土』の著者石牟礼道子の個々の作品の紹介ではなく、それら作品を貫き生み出す石牟礼の思想についての解説である。

石牟礼の文学は脱近代の文学で、論理的な因果関係を無視し、主体と客体といった近代の二元論を超えようとするという。ルネサンスに始まる「近代」は水俣病を生み出して、その極点に達した。これに対する「脱近代」的な価値への転換の石牟礼の集大成ともいうべき行動が、メチル水銀を水俣・不知火の海に垂れ流し続けたチッソ東京本社前の座り込みであった。この抗議行動は「あらゆる世間的な絆を自らほどいて決別して行く」もので、これを石牟礼は「道行き」と呼ぶ。安易な同情や連帯、団結ではなく、徹底的に孤立して一人でもあの世に行かねばならないと思い合っている者どうしが絆を結ぶことだという。近代化によって崩壊した共同性（自己・他者・自然の関係）をどう再構築したらよいか。石牟礼はこの道行き論による新しい絆で「共同救済」のあり方を展望する。

◆1836円・四六判・146頁・**弦書房**・福岡・2016/9刊・ISBN9784863291393

『秋田・廃村の記録　ー人口減時代を迎えて』●浅原昭生・林直樹著



廃村という言葉にどのようなイメージを持つでしょうか？山奥の木立の暗がりの影に今にも崩れ落ちそうな廃墟がひとつ…。暗い印象を持つ方も多いと思います。しかし本書に取り上げられた廃村を見ればそんな印象は必ずしも正しくないことに気付くでしょう。本書では秋田県の廃村を平成7年頃と平成27年でどのような変化があったかを比較しています。雪の多い秋田では建物が崩れ、廃墟等があるのは確かです。しかし多くの廃村では人こそ住まなくなったものの、まだまだ随所に人の手は入っています。しかも農地として活用されている場所は極めて多くあり、別宅のような建物さえあるところもあります。廃村探訪で地元の方に出会うことも稀ではありません。定住者がなくなり廃村となっても、その土地に手を入れる人がいる限りその場所は生きていると言えるのではないかとも思えてきます。過疎化に悩まされる地方の集落の今後を考える上でも、大きな示唆を与えてくれます。

◆ 1620円・四六判・208頁・**秋田文化出版社**・秋田・2016/10刊・ISBN9784870225725

『外交官・松岡洋右の俳句』●松岡洋右著

松岡洋右の名前は一般の日本人にとっては、国際連盟脱退や日独伊三国同盟、日ソ中立条約といった歴史的な出来事と結びついているのではないか。その松岡は、不息という俳号で多くの俳句を残していた。本書では、昭和16年以降日記代わりにしていたという百六十句ほどが掲載されている。素人目で見ても作品はうまいとは言えないように思えるが、歴史的な事実と照合しつつ読むと、感慨深いものがある。昭和16年と言えば、4月に日ソ中立条約が調印された年であり、外交責任者としての松岡の全盛期にあたる。〈はてしなき雪の樹海をけふもゆく〉等、シベリアの白樺の林を印象的に切り取った句で始まるその旅の記録は、条約が調印された4月13日の〈十三日約成りて亡き母想ふ〉の句で最高潮に達する。またこれに並ぶ〈亡き母のうつし魂にただむせびけり〉では、亡き母親に仕事をやり遂げたことを人知れず報告する達成感が溢れ出ているのを見ることができよう。感極まり季語に無頓着になっている。

◆ 1944円・四六変形判・199頁・**東京四季出版**・東京・2016/9刊・ISBN9784812908976

『ホッピー文化論』●ホッピー文化研究会著

1948年に発売されたホッピーはアルコール分0.8％で、わかりやすく言うと一種のノンアルコールビール。当時はビールが高級品であったため、代用品として爆発的に売れたが、焼酎で割るのが王道とされている。

ホッピーのイメージは「東京下町の中年男性の酒」というのが一般的だろうが、昭和ノスタルジーのレトロブームと連動したり、低カロリー、低糖質、プリン体ゼロという謳い文句で健康志向にマッチしたり、サブカル系テレビ番組で紹介されたりと、発売当初を含め、三度のブームがあった。

ホッピーについて研究することで現代の社会や文化、人間を学ぶのが本書の目的。幼い頃にジュースにも通ずるホッピーという響きに魅了された昭和50年代生まれの6人の研究者のフィールドワークが実を結んだ。社会学や人類学の見地から、ローカルでマイナーだけれど不思議な魅力を持つホッピーを通して時代を探る。

◆ 1296円・四六判・177頁・**ハーベスト社**・東京・2016/8刊・ISBN・9784863390799

『渋谷の農家』●小倉　崇著

渋谷といえども元々は江戸郊外ののどかな田園。だから、都市近郊農業の話しかと思いきや、驚く勿れ、渋谷も渋谷のど真ん中、ラブホテルが立ち並ぶ道玄坂の、ラブハウスの屋上で農業を営む男の物語。

著者は出版・広告を中心に活動するクリエイティブ・ディレクター。その傍らで、農業ライターとして全国の有機農業を取材してきた。原発事故で無力感の漂う日々の中、都会から神奈川県相模原町に移住して自然栽培を実践する新米農家の作ったホウレンソウを口にし、これが野菜の本当の姿であったのかと衝撃を受ける。真剣に農に向き合う人々との様々な出会いを経て2015年、友人が経営するビルの屋上に、空の近さ、吹き抜く風に感動しながら、1.5 m×3.5 mのプランター3個を据えつける。キャベツ、サニーレタス、ルッコラ、水菜、ラディッシュ、トマトなどなど。本気で働けば、本当にできる。「農は楽しい、農は嬉しい、農は美味しい」。それが著者からのメッセージ。

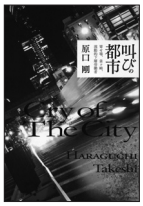
◆ 1728円・四六判・277頁・**本の雑誌社**・東京・2016/9刊・ISBN9784860112912

売行良好書

期間：2016年10月15日～11月14日

［出荷センター扱い］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『あひる』1404円・書肆侃侃房　(2)『ホッピー文化論』1296円・ハーベスト社　(3)『赤ずきんとオオカミのトラウマ・ケア』1944円・アスクヒューマンケア　(4)『叫びの都市』2592円・洛北出版　(5)『新編　荒野に立つ虹』2916円・弦書房　(6)『わたしたちの猫』1512円・ナナロク社　(7)『本人に訊く（壱）』2376円・椎名誠旅する文学館　(8)『熊本地震　連鎖の衝撃』1500円・熊本日日新聞社　(9)『古本屋ツアー・イン・京阪神』1944円・本の雑誌社　(10)『一畑電車写真集』2160円・今井出版　(11)『医者、用水路を拓く』1944円・石風社　(12)『フィールド版　木の実のガイド』1620円・トンボ出版　(13)『ボクシングと大東亜』2376円・忘羊社　(14)『モンゴル人の民族自決と「対日協力」』3218円・中国書店



［三省堂書店神保町本店　センター扱い図書］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『昭和プロレスマガジン　４０』1000円・昭和プロレス研究室　(2)『古本屋ツアー・イン・京阪神』1944円・本の雑誌社　(3)『本の雑誌　４０２号』720円・本の雑誌社　(4)『たべるのがおそい　ｖｏｌ．２』1404円・書肆侃侃房　(5)『あひる』1404円・書肆侃侃房　(6)『石神さんを訪ねて』1404円・山陰中央新報社　(7)『東京かわら版　１１月号』500円・東京かわら版　(8)『たべるのがおそい　ｖｏｌ．１』1404円・書肆侃侃房　(9)『ぐんまの城三〇選』1728円・上毛新聞社　(10)『吉野朔実は本が大好き』3240円・本の雑誌社

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『ぐんまの城３０選』1728円・上毛新聞社　(2)『文学ムック　たべるのがおそい』1404円・書肆侃侃房　(3)『不登校は１日３分の働きかけで９９％解決する』864円・リーブル出版　(4)『連鎖の衝撃』1500円・熊本日日新聞社　(5)『叫びの都市』2592円・洛北出版　(6)『つまみ細工』2160円・かりん舎　(7)『奥多摩登山詳細図（東編）　大岳山・御嶽山・川苔山・棒ノ嶺　全１３０コース』950円・吉備人出版　(8)『倶舎』2592円・自照社出版　(9)『宮川彰　資本論講座　第１巻講義要綱』1080円・ほっとブックス新栄　(10)『もうひとつのこの世』2376円・弦書房

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

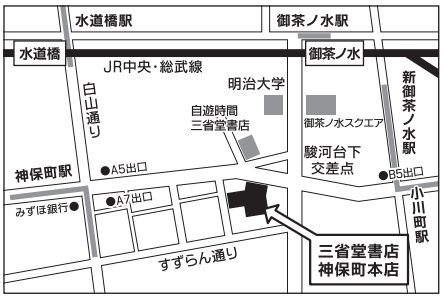
トピックス ―― ★★★

▼【こちらあみ子】の衝撃から６年、新たな今村夏子ワールドへ…第155回芥川賞候補作を含む**【あひる】**が11月に刊行となりました。表題作『あひる』のほか書き下ろしの『おばあちゃんの家』『森の兄妹』を収録。初版分はすぐに品切となり、増刷は12/1頃の予定です。今村夏子著・本体価格1300円・ISBN978-4-86385-241-9・**書肆侃侃房**（しょしかんかんぼう）刊。「読み始めると心がざわつく。何気ない日常の、ふわりとした安堵感にふとさしこむ影。淡々と描かれる暮らしのなか、綻びや継ぎ目が露わになる。」（フライヤー紹介文より）

▼「信州しおじり本の寺子屋」講演会のお知らせ。
12月4日／日曜日／講演会【これからの読書のすがた】荒川洋治
2017年1月30日／月曜日／講座【選書でひらく図書館の未来】豊田高広
場所：塩尻市立図書館
〒399-0736　長野県塩尻市大門一番町12番2号（えんぱーく内）
電話：0263-53-3365（直通）
FAX：0263-53-3369

郵便販売のご注文方法

◎お名前、お届け先（郵便番号、住所）、連絡先お電話番号、ご注文品の書誌名、冊数の必要事項を明記のうえ、下記までＦＡＸでご連絡ください。
◎送料は、冊子小包・メール便共実費でお送りさせて頂きます。基本的にメール便は、一冊２１０円でお送り致します。（メール便の到着は、発送してから３～４日かかります。）お急ぎの方、その他ご要望がございます場合はお気軽に下記までお問い合せ下さいませ。
◎なお書籍お買上総計（税抜き価格）が5,000円以上の場合は、送料をサービスさせて頂きます。
★地方・小出版流通センター
ＦＡＸ：０３－３２３５－６１８２

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

三省堂書店 BOOKS SANSEIDO
営業のごあんない
神保町本店 ４階
地方出版・小出版物フロア
営業時間 10：00 AM～8：00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp
本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。